

## 巻頭言

# 私の人生における 「働くこと」と「学ぶこと」の関係性

寺脇 研 (星槎大学大学院教育学研究科特任教授/協同総研副理事長)

生きることは、「学ぶこと」と「働くこと」によって成り立っている。

子どもたちや若者たちに、迷いなくそう語りかけている今のわたしだが、こう確信するようになったのは三十代半ばの頃なのだから、そう威張れたものではない。大学を出るまでは、「働くこと」に関する意識など、まるでなかった。文部省(当時)に入省して働くことになる、日々の仕事をこなすことで精一杯であり、今度は「学ぶこと」をすっかり忘れてしまっていた。

「学ぶこと」と「働くこと」が両立しなければ、心豊かに生きることはできない。——このことを明確に理解させてくれたのは、「生涯学習」という考え方だった。1987年に出された臨時教育審議会答申は、生涯学習社会の実現を最大の目標に掲げていた。当時、中堅クラスの役人だったわたしは、この理想にすっかり共鳴したのである。

何より賛同できたのは、「学習」という概念が根源となった点だ。自分自身、「教育」として教師から一方的に教え込まれる受け身の立場に馴染めないまま学校生活を終えていた。学校そっちのけで、本を読んだり映画を観たりして多くのものを学び取った経験からすると、「教育」

されるのではなく自らが主体となって「学習」するのが基本なのだとする考え方は、我が意を得たりと思えたのだ。

同時に、学習は生涯にわたって行われるものであり、その場合の学ぶ対象は、アカデミックな分野にとどまらず「遊び」に見えるジャンルまで多岐にわたるとの定義付けが魅力的だった。よく考えてみれば、仕事の傍ら膨大な数の映画を観続け、二十代の終わり頃からは落語にも熱中していたわたしは、「働くこと」と「学ぶこと」をみごとに両立させていたわけだ。文部省の仕事をする際に、映画や落語で学んだことがさまざまな形で生かされたし、映画や落語の評論を書くときには、仕事での経験に基づく社会観が少なからず役に立った。

一方で当時の日本社会の状況に目を向けると、戦争を体験し戦後の経済成長を成し遂げた世代が、全てをなげうって打ち込んできた職業人生からリタイアする時期にさしかかっていた。と同時に、人生80年時代の到来が告げられた頃でもある。仕事人間だったオジサンたちが定年後の時間を持て余し、「濡れ落ち葉」と名づけられて89年度流行語大賞となったくらいだ。

「働くこと」の最中に「学ぶこと」はで

きなかったかもしれないが、せめて「働くこと」を終えた後には楽しい生き甲斐として学んでもらえるよう環境整備しなければならない。88年から生涯学習を担当するポストに就いたわたしは、そう考えて、地域社会において多種多様な学びの機会を用意する仕事に邁進した。その結果、地域で学ぶ社会教育の世界で生涯学習の概念が急速に浸透していったのは喜ばしい。

だが、「働くこと」を終えてからでは、本当は遅すぎる。生涯にわたって「働くこと」と「学ぶこと」をつなげて両方を自分の生きる基盤としていくためには、「働くこと」を始めるより前の学校時代に生涯学習の意識を身につける必要があるのだ。

ところが、学校教育の世界では、なかなか生涯学習の理念自体が根付かなかった。

92年に初等中等教育局職業教育課長になったわたしは、農業、工業、商業、水産、介護などの職業高校(現・専門高校)を振興する任務に就き、職業に即した教育を根幹とするこれらの学校で、「働くこと」について学ぶ動きを活発化させた。また、多様な進路選択を前提に、必要な科目を生徒自身が選択して学ぶ総合学科高校制度を創設したのである。

しかし、学校教育全体で見ると、「働くこと」への意識は極めて低いものだった。むしろ、職業高校を廃止して全部普通科にしていくべきとの意見さえあったのだから道は険しい。「働くこと」など

に見向きもさせず、ひたすら受験科目を勉強させ、できるだけ大学進学之道へ進ませようという学歴信仰が蔓延していた。これでは、大学で就職活動を始めるまで、「働くこと」をほとんど意識しないことになる。

これを打破するために、子どもの学校滞在時間を短縮し、家庭で保護者の生活ぶりにより多く接したり、地域でさまざまな大人と共に活動したりできるようにするため、02年から完全学校週五日制を導入した。また、同時に創設した「総合的な学習の時間」では、子どもと地域社会とを結びつける学習活動によって、親や先生だけでない多様な職業や立場の大人に出会う機会を設定したのも、「働くこと」へ目を向けてもらう狙いだったのである。

こうした変革の動きは、残念ながら「ゆとり教育」のレッテルを貼られ、子どもの学力が低下するという根拠のない思い込みに押されて、なかなか前へと進まなかったのは事実だ。ただ、文部科学省はその方向性だけは守り通した。その結果、20年から順次始まった新しい学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」という生涯学習の理念がスローガンとなっている。

この機を捉え、「働くこと」と「学ぶこと」を、より一層強くつなげていくために、協同総研としても積極的に学校教育へのアプローチを強めていきたいものである。